

～2015年2月22日実施（石垣フサキ沖リーフチェックのコメント）～

2015年2月25日 吉田稔

○5mライン

5mラインはその細長い根の天端部に設定された。サンゴ類の目視での被度は70～80%で卓状ミドリイシ類が主体である。全体のサンゴ類の70%程度をミドリイシ類が占めていた。つぎにソフトコーラル類が多く見られ、そのほかキクメイシ類、ハマサンゴ類、ウミバラ類などが見られた。RC底質調査のハードコーラル占有率は68%でソフトコーラル占有率が8%で両方合わせると76%と非常に高い値を示している。現在の石垣島周辺および石西礁湖の中でもトップクラスのサンゴ被度の高さである。また、直径5cm以下の新規加入のミドリイシ類も多く見られた。

オニヒトデと思われる食痕が4～5箇所で見られた。RC無脊椎調査では5mラインで2個体確認されている。そのほか病気か貝類の食痕がよくわからないものも2～3箇所で見られた。魚類、無脊椎に関しては普通に見られるものが普通に確認された。

○8mライン

8mラインはその細長い根のスソ部（最下部）に設定された。サンゴ類の目視での被度は50～60%と5mラインよりやや低い。卓状ミドリイシ類、散房花状ミドリイシ類が主体であった。RC底質調査ハードコーラル占有率も58%で5mラインより低い。その原因として、8mラインは根の底面に近い部分に設定したため、根と根の間、根の湾曲した部分などで底質の砂礫部を通過する範囲が多くなったので全体的なハードコーラル占有率が低かった。ちなみに礫占有率（RB）は、5mラインが3%で8mラインが38%であった。8mラインを根に沿わせて張るとサンゴ占有率は10%程度上がると思われる。8mラインでもオニヒトデの食痕か病気かよくわからない死亡が4～5箇所で見られた。魚類、無脊椎に関しては5mラインと同様に普通に見られるものが普通に確認された。

○総評

フサキ沖のリーフチェックの設定された海域は、岸から1km程度沖に向かってなだらかに水深5～7mまで落ちていき平坦な地形で、典型的な礁池、礁斜面の特徴がない。その砂礫底に高さ4～7m程度の幅10～12m、長さ20～50m程度の細長い根が北西から南東方向に櫛状に並んでいる。サンゴ類の生育する範囲（岩盤上）だけで見てみると被度は全体で70～80%あり、先述したように現在フサキ沖から新川沖にかけて非常に高い被度でサンゴが生育しており石垣島周辺でもっとも状態のよい海域である。2010年から石垣島北部から大崎までのサンゴ類を食い尽くしたオニヒトデがなぜ名蔵湾に回り込んでこなかったか不思議でありよくわかっていない。

その健全な状態の中で数箇所のオニヒトデ食痕と病気らしい死亡とが5mライン、8mラインとも数少ないが目立っていた。仮に直径10cm以下のオニヒトデがいると仮定して、その食痕は小さく順々に食べて進み昼間は隠れてしまうので、病気の死亡のようにも見える可能性がある。病気よりもかく乱の影響が大きいオニヒトデである場合は、半年後～1年後に大発生になる可能性があるので注意して監視する必要がある。また病気であった場合でも感染症のようなものであれば広がる可能性もあるので留意する必要がある。

一方、直径5cm以下の新規加入のミドリイシ類が5mと8mともに多く見られ良い要因も確認することができた。

以上